

意見交流を通して自分に合った英語学習を選び取り、実践しようとする子ども

— 中学2年 Unit 3 My Future Job の実践から —

1 単元のねらい

英語の学習について、自分の目的や達成したいことを思い描き、英語で理由とともに表現し、友だちに書いて伝えることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえ

以下に示すふりかえりは、Fuzoku English Dayのまとめとして、活動全体を振り返ったものである。※ Fuzoku English Day=本校近隣に生活する外国の方をお招きして、英語でワークショップをひらいていただく授業。15分のワークショップを生徒8人ずつで3種受講した。

自分が話したことが(相手に)通じて嬉しかった。でも、まだわからないことばもたくさんあるので、もっと喋れるようになりたいし、(相手の話している内容が)わかるようになりたい。(生徒A)

ゲストのみなさんとお話をすごく楽しみにしていました。実際にしゃべりたいことがたくさんあったけれど、それを英語でしゃべるのは大変でした。これからもっと英語の勉強をがんばらないといけないなと思いました。(生徒B)

このような記述から、英語という言語を通して意志の疎通を図ることができた喜びを生徒が感じていることがうかがえる。また、多くの生徒が上述の生徒と同様に、自分の英語で伝える力や情報を受け取る力を伸ばしていきたいと考えている。しかし、外国語を身に付けるにあたって、何をどんなふうに学習していったらよいかわからないという生徒も多い。そこで、どの生徒も抱いているであろう、英語が上達するためにはどのようなことをしたらよいかというテーマで意見を交流し合うことで、生徒が学び続ける意欲をもつ姿を期待した。

本単元の学習の導入前に、生徒に「英語ができるようになりたいか」と質問をしたところ、当該学年の大多数の生徒が「なりたい」と答えた。そこで、英語の4技能のうち、どの力を伸ばしたいかを問うた結果が右グラフである(図1)。やはり、生徒のとらえる「英語ができる」という状態は自分の思うこと・考えたことをきちんと伝えることができるという「話すこと」に焦点が当たっていることが再確認できた。

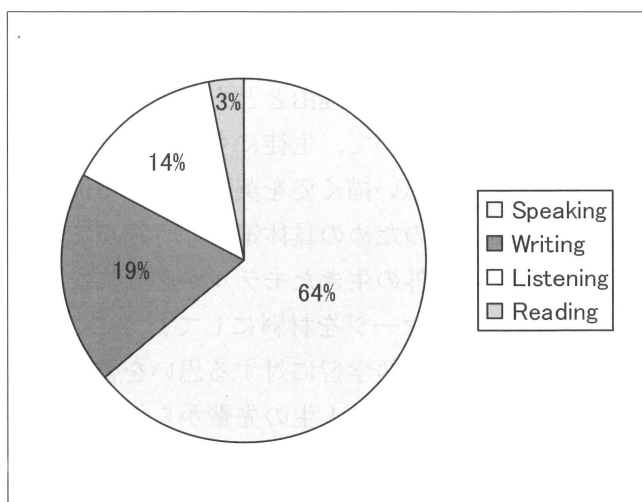


図1:「4技能のうちどの力を伸ばしたいか」

しかし、自分の思いや考えを相手に伝えるにあたって、不確かな内容では相手も困るし、何もないところからは会話も生まれません。つまりは何かから情報を得ることが必要である。その何かとは身近な友だちとの会話から得られるかもしれないし、教科書などの書籍を読んだりウェブサイトを見たりすることで得られるかもしれない。つまり、話すためには「読むこと」も「聞くこと」も必要なのである。とりわけ、自分

にとって必要な情報を読み取るためには、語彙力・文法理解などが必要となるが、それとともに、生徒自身が「読みたい」と思える対象と出会わせることも必要である。そこで、本単元では「英語ができるようになる」ためにどう「読むこと」と向き合い、その表出方法を記録に残る「書くこと」とすることとした。

本単元の教科書本文には、英語学習への動機付けや、将来の夢や職業選択に英語を役立てたいと考える生徒が描かれている。本学級にも同様の考えをもつ生徒や、英語学習自体に意義を感じることができなくても、なんとかしてできるようになりたい、わかるようになりたいと考えている生徒がいる。中学2年生にとって、教科としての英語だけでなく、世の中とつながることのできる言語としての英語を身に付けてほしいと考えている。昨今世間で「英語の学び直し」をテーマとした書籍も多い。中学生のうちのように英語を学んでいくと、自分が思うように英語ができるようになるかを考え、自分なりの方法を獲得しておくことができれば、生徒が自ら進んで学習し続けることができるだろうと考えた。そこで本校の卒業生に、“What do you do to improve your English?”と尋ね、回答してもらった。自分達にとって身近なモデルとなる人達が、何を考え、どのように学習してきたかを読み取ることは、自分もやってみよう、あるいは自分にもできるかもしれないと思える等身大の好例である。また、先輩が今後どのようになりたいと思っているかを読み取ることは、キャリア学習の側面も担うだろう。

(2) 本単元において求めたい姿とそのための手立て

英語の学習について、自分の目的や達成したいことを思い描き、英語で理由とともに書いて伝えることを目指し、本単元を構想した。その際、読んだ内容を書く活動にいかすため、質問に対する返答を読み比べる活動を設定した。第5時では、次のような手順で教科書本文の読み比べをする活動を取り入れ、質問に対する返答の適切さを生徒が自分なりに考えることができるようにする手立てとした。

手順1：質問文を読み、質問者の意図をつかむ

手順2：それぞれの返答文における、質問に対する直接の答えの部分を見付ける

手順3：質問者の意図を軸にしたマトリックス図により、各返答者の立場を可視化する

手順4：マトリックス図から、各返答者のうち誰の返答が適切であるか、また自分は誰の返答に共感できるかどうか、理由とともに述べる

上記の手順により、比較する、一般化するなどの読み比べの過程を経て、どの返答に最も共感できるかを生徒それぞれが理由とともに述べるようになるように考えた。

本単元の終末において、生徒にも“What do you want to do to improve your English?”と尋ね、自らの目的や思い描く姿を英作文をする活動を設定した。生徒自身も英語学習を始めて間もないので、英語上達のための具体策という視点で自らの考えを書くことは難しいと予測していた。つまり教科書本文以外の生きたモデルが必要になる。そこで、第6時では第5時と同様の学習活動を卒業生からのメッセージを材料にして行うこととした。卒業生の書いた返答を読み比べる活動を、生徒自身が自らの英語学習に対する思いを書く前に設定する。教科書本文の返答文は目標言語材料の使用例としても、また人生の先輩からのメッセージとしても大変立派な内容である。しかし、生徒にとってより身近な先輩からの返答であれば、「自分もその方法を試してみたい」「目標をもって英語の学習を具体的に進めていきたい」などという気持ちが積極的な読み取りを効果的に進めるのではないかと考えた。単元の終末に行う「英語をどう学習したらいいか」という意見交換のための英作文では、先輩の実践のよいところや、自身が普段取り組んでいることについて書く生徒の姿を期待した。そしてお互いの英作文を読み合うことが、今後の英語学習のヒントを得る好機となればと考えた。

3 展開計画（全8時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇追求する子どもの姿
1	1～2 3～4	○行動の目的が語れるようになるう ・物語の説明をしよう ・何のために英語を勉強するか考えよう ○自分のしたいことが語れるようになるう ・職業適性クイズをしよう ・英語を使ってどんなことがしたいか語り合おう ・物語クイズをしよう	◇どのような表現が目的や理由を述べるのにふさわしいだろうか
2	5 6 7 8	○英語が上達するためにはどうしたらよいだろうか ・質問に対する返答文のうち、どれに共感するかを考え、その理由とともに表そう ○英語をどう学習したらいいか考え、意見交換しよう ・先輩からの返答を読んで、理由とともに共感する返答文について伝え合おう ・質問に対して自分の意見を持ち、理由とともに表そう ・お互いの意見文を読み合って、英語学習のヒントにしよう	◇何について表すことが質問の返答と言えるだろうか ◇先輩の考えや方法でどのように上達するだろうか ◇自分は今後どのように英語の学習を進めていくとよいだろうか

4 授業の実際

「英語ができるようになりたい」という生徒の思いに応えるために、「読むこと」にフォーカスした単元構成で授業を行った。これより、本単元で「読むこと」をどのように提示していったかを順に述べていく。

(1) 生徒の「読み」を支える対象との出会い

① 文法理解を支える教材の提示

本単元の新出文法事項は不定詞の3用法(名詞的用法, 副詞的用法, 形容詞的用法)である。文法指導の導入部に生徒の既知の情報が使えないかと考えた。そこで、生徒の過年度までの学習を振り返って、本単元で利用できる材料を集めた。

(i) 小学校外国語活動の教材の利用

多くの生徒が、小学校外国語活動で”Hi, friends!”を使用している。そこで, ”Hi, friends! 2 Lesson 7 We are good friends.”を利用して, 生徒になじみのある「昔話」題材として不定詞の導入と定着のための練習を行った(図2)。“Peach Boy”の朗読劇をした生徒もちろんいるが、『桃太郎』という話の内容を生徒はよく知っている。そこで絵を提示しながら次のようなやり取りを副詞的用法の導入として行った。

このやり取りをもとに, おばあさんについてペアで質問し合い, さらにその後の桃太郎のストーリーを追うような質問とその答えを

ペアで作り, 物語の説明をする活動を定着のための練習とした。生徒にとっては, なじみのあるストーリーと教具であったため, 進んで副詞的用法の文をつくることができた。

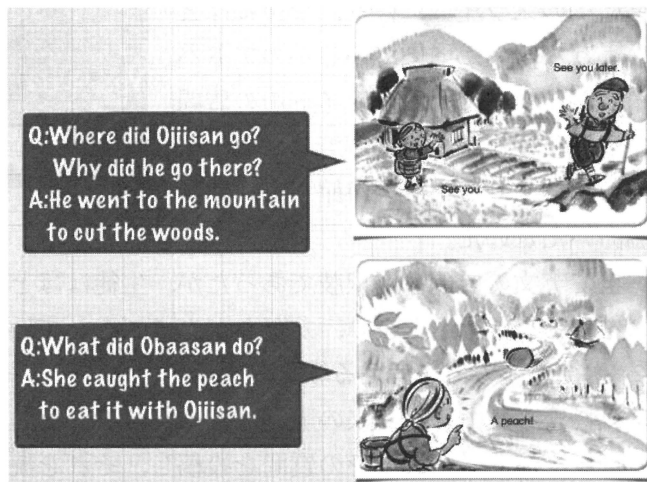


図2：小学校外国語活動教材利用例－1

T 1 : Who is this?
 S 1 : Ojisan.
 T 2 : Yes, where did he go?
 S 2 : He went to the mountain.
 T 3 : That's right. But why did he go there?
 S 3 : しばかり…? In English…?
 T 4 : Ojisan went to the mountain to cut woods.
 Let's say with me.
 T&Ss : Ojisan went to the mountain to cut woods.

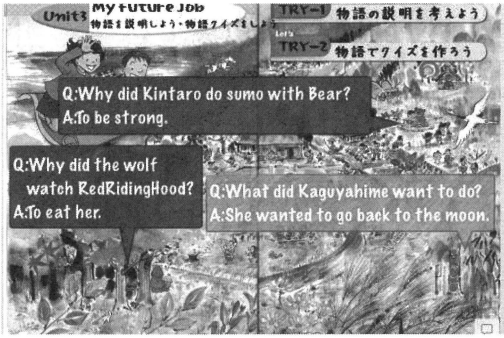


図 3 : 小学校外国語活動教材利用例 - 2

さらに、Lesson 7 の扉絵を利用して、物語クイズを作った (図 3)。この扉絵には日本の昔話だけでなく、外国の童話も描かれている。題名は知っていても、内容は知らないという話がある生徒もいたようである。『金太郎』を例に "Why did Kintaro do sumo with Bear?" と問いかけると、"To be strong." "To win." "To be a good samurai." など様々な答えが出た。

(ii) 職業適性クイズの利用

本単元の教科書本文では、将来の夢や職業選択も話題になっている。昨年度、本学年の生徒は進路学習の一環で「職業調べ」を行っている。その際に多くの生徒は職業適性クイズに挑戦し、自分に向いている職業についての調べ学習を行った。そこで、同じような形式のクイズに英語で挑戦してみる中で、不定詞の名詞的用法に親しませることを考えた。

右のスライドはその職業適性クイズの一例である (図 4)。インタラクティブリンクを張り、選択肢を選ぶごとに次のスライドに移り、最後にはどのような職業が向いているかのアドバイスが示される。本スライド中の質問や選択肢の作成にあたっては、本学校の小林まりこ学校図書館司書教諭に協力いただいた。

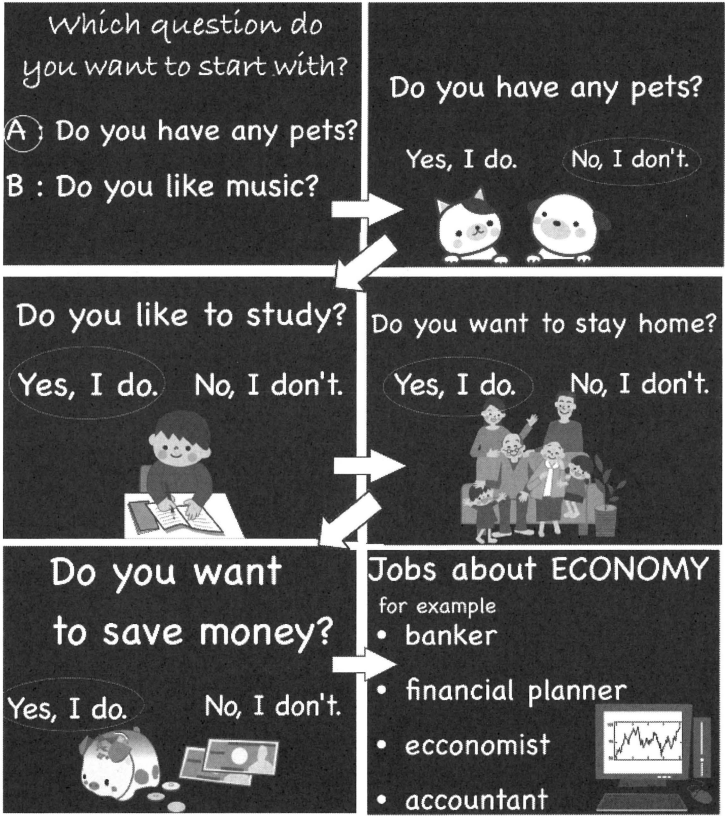


図 4 : 職業適性クイズの例

全て英文の質問や選択肢であったが、生徒はほとんど抵抗なくクイズに取り組んだ。自分がクイズをするときはもとより、友だちがクイズをしている間も興味をもっている様子であった。

② 生徒が読み方を考える教材の提示

教科書本文では、将来の職業選択にあたり、英語を上達させたい女子高校生がインターネット上の意見交流サイトに自身の質問を投稿し、それを読んだ 3 人がそれぞれにその生徒に向け返答を投稿するという場面がある。三者三様の回答であるのだが、質問した生徒の立場になってみると、誰の返答が最も有用であったかが読み取りの視点になる。そこで、それぞれの返答を読み、その内容を比較してみる。そして自分が質問した生徒であれば、誰の意見に最も共感するか、自分の考えを理由とともに述べる活動を設定した。

3人の回答内容を読み比べるに先立って、質問者が求めているアドバイスは何であるかを正しく読み取る必要がある。生徒からは“*To improve English.*”と“*To work abroad as a tour guide.*”の2点が挙がった。そこでこの2つを軸に、3人の回答がそれぞれのアドバイスに近いかを可視化するマトリックス図を作り、3人のうち誰の返答が最も質問者のニーズに答えるものになっているかを確かめた(図5)。そして、それぞれの返答を図示したシートをもとに、自分が共感できる考えや英語の学習への取り組み方について理由とともに述べる活動を行った。

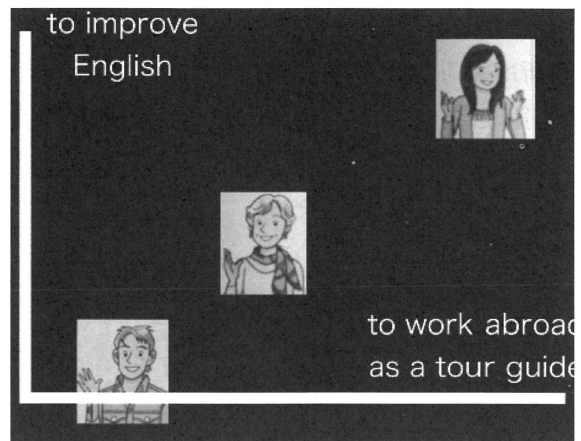


図5：読み取りのためのマトリックス図

「何のために読むのか」「何が理解できればよいのか」という読み取りの視点がはっきりすることで、生徒は学習活動に進んで取り組むことができた。また、英語をどう学習したらよいかというテーマは生徒たちにとっても有益な情報であったため、意欲的に読み進めることができたと思われる。

③ 生徒自身が読みたくなる教材の提示

生徒は教科書本文の理解を通して、英語学習の様々な方法を知ることができたが、やはり「教科書で扱われている内容」はどこか自分から遠いものとしてとらえているようであった。そこで、生徒が自分のこととしてとらえられるような、生徒にとって身近で進んで読みたくなる教材の提示が必要となる。

本単元では、生徒にとって身近な題材として卒業生からのメッセージを材料にして行った(図6)。「英語力向上のために何をしたらよいか」という質問に対して卒業生の書いた返答を読み比べる活動である。本校の卒業生(現在高校3年生)から寄せられたメッセージには大きな力がある。生徒にとって少し先の自分の姿としてとらえることができるため、「先輩がやっていること(やってきたこと)なら学習効果があるのではないか」「自分と同じような学生がやっていることならば自分にもできるのではないか」と前向きに読むことができる。

実際には高校生の書いた英文であるため、使用される語彙は難しいものもあり、未習の文法項目も多々使用されていた。また、普段生徒が「読む」英文は、自らの手書き以外はほぼ活字であり、他者の手書きのアルファベットを読み取ることは慣れないことで難しい作業でも

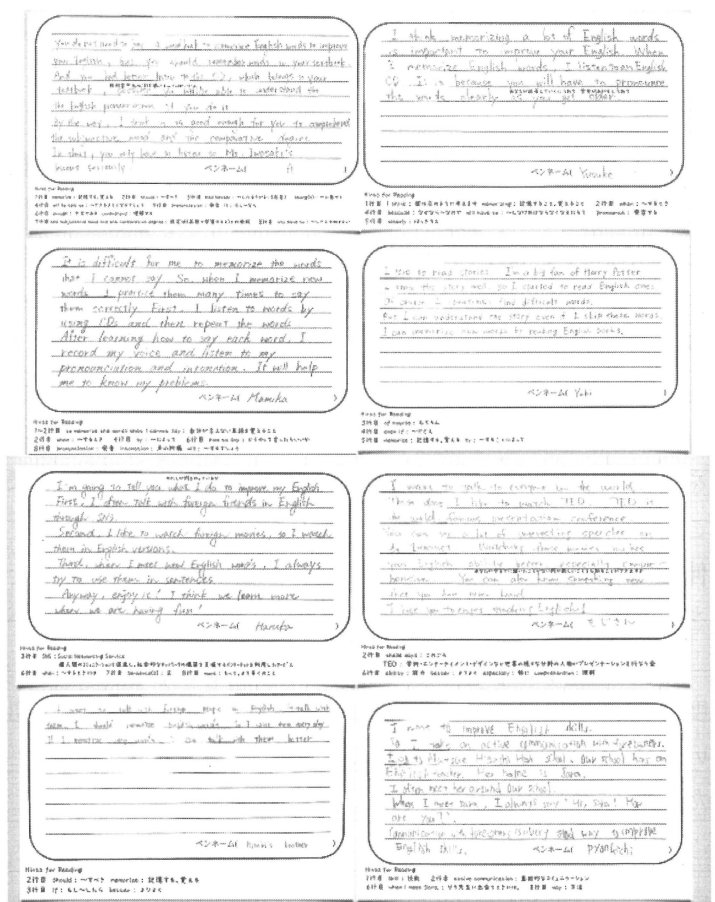


図6：高校生からのアドバイス文

あった。授業で扱う際には最低限度の注釈もつけたが、多くの生徒が自ら辞書を引き、わからない箇所はお互いに教え合ったり授業者に尋ねたりしながら、自分で理解しようとする姿を見せた。

(2) 第2次の授業より（相手のある表現活動）

上述したような教材との出会いのある本単元の学習を通して、生徒は新出文法事項に慣れ親しみ、読み取りの視点を獲得し、英語学習についての新しい方法や情報を得ることができた。先輩からのアドバイスや友だちとの意見交流から、生徒は英語力向上のための自らの目的や思い描く姿より具体的にすることができたと考える。そして単元の終末の活動として、今後英語をどう学習して

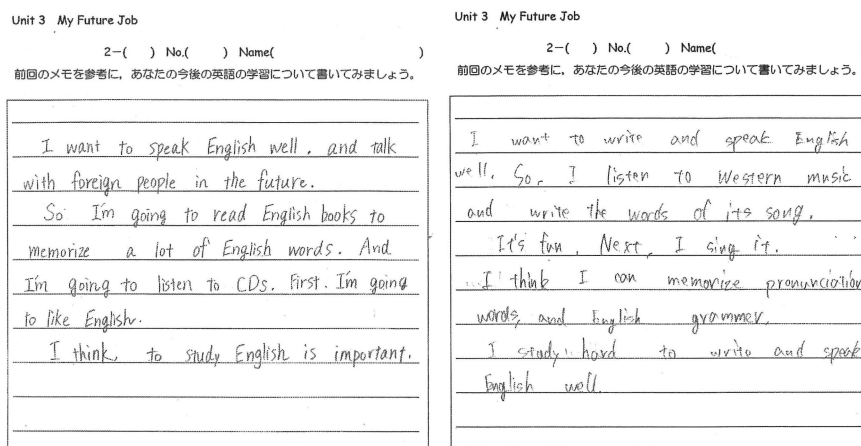


図7：単元終末活動の生徒英作文（今後の英語学習について）

いくとよいかを自分なりに考え英作文した（図7）。先輩の実践のよいところや、すでに普段やっていることについて書く生徒もあり、生徒の英作文からは「自分にもできそう」「やってみよう」という前向きな気持ちが伝わってきた。

また、それぞれが今後の英語学習について述べた文を互いに読み合う活動を行った。お互いの学習の仕方にコメントをし合うのだが、「自分もその方法がいいと思う」「一緒にがんばって勉強していこう」などという相手の実践しようと思う方法に対して肯定的なメッセージを寄せ合っていた。

5 おわりに

本単元では、「読んだことをもとに書くこと」を生徒に求めたが、生徒の思う「伸ばしたい力」と授業者の思う本単元の学習を通して生徒に「身に付けたい力」が異なっていたことが課題である。英語科では4技能を統合的に指導し、その力を伸ばしていく必要があるが、その中で生徒のニーズに応えることができるとなおよいと考える。しかし、どう思ったか・どう考えたかという意見交流をさせるとき、生徒同士では英語で話す必要性よりも、より高次でスムーズな意見交換を優先させるためか母語での交流のほうが主になることがある。そこで、本単元では意見のやり取りは母語であっても、最終的に学習者自身が成果を振り返ることのできる「書くこと」を目指して授業を行った。もちろん意見の述べ方や本単元で習得してほしい文法事項を盛り込んだ帯活動で「話すこと」や「聞くこと」を繰り返して行うこともしてきた。単元の初発に生徒たちには「話すこと」を伸ばしたいという願いがあるとわかった時点で、英語を話す必要性のある場の設定を行い、その力を付け、それが実感できるような単元構想の練り直しが必要であったかもしれない。

「英語ができるようになりたい」という思いは、英語を学習したことのある者であれば誰もが一度は抱く思いであろう。英語学習の長い道のりの入門期にいる中学生とともに「どう学習したらいいか」というテーマと一緒に学習について考えることができたことは、学びの種を蒔くことになったのではないかと考える。

（文責 岩崎 香織）